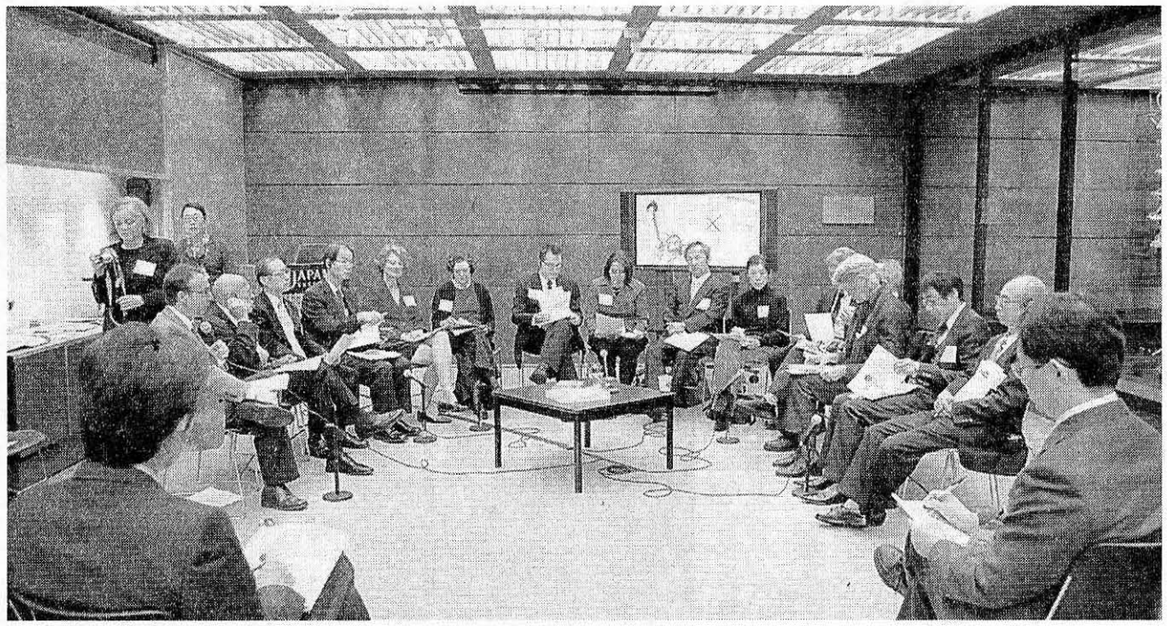
京都創生海外発信プロジェクト

京町家保全NYで訴え

円卓会議とフォーラム開催

京都の奥深い魅力を海外で直接PRし、まちづくりを中心に市民レベルの交流を深める「京都創生海外発信プロジェクト」（京都市、市景観まちづくりセンター主催）が十一月三日から十日まで、米国で行われた。ニューヨークでは京町家保存に取り組む京都の市民団体や研究者らが、現地で歴史的建造物の保存とその支援に携わる人たちと意見を交わし、京町家が減少する「危機」も訴えた。来年に京都市との姉妹都市提携五十周年を迎えるボストンでは、プレイベントとして雅楽の公演などが行われた。現地の様子を詳しく紹介する。



「歴史保存のための資金調達」をテーマに開かれた円卓会議（ニューヨーク市・ジャパン・ソサエティー本部）

町並み保存 資金調達が鍵

市民や研究者 熱く討論

十一月四―六日は、ニューヨークで創立から約百年の歴史がある全米最大の日米交流団体「ジャパン・ソサエティー」本部を会場に円卓会議と公開フォーラムがあり、視察も行われた。米国側は市民団体と支援する財団の代表らが出席し、京都の市民団体や企業の代表、大学教授、京都市幹部らと町並み保存への思いを共有する参加者たちが、熱心に意見を交わした。

円卓会議は四日が「米国における歴史的建造物保存運動の発展と哲学」、五日は「歴史保存のための資金調達」がテーマとなった。

資金調達の会議では、世界各地で百カ所の貴重な自然景観や建造物を「ウオッチリスト」として選び、保存の資金を支援するワールド・モニュメント・ファンド（WMF）のボニー・バーナム理事長が「寄付する側はその分野の専門家になりたいと思っている。そういう人を教育することも大事」と助言した。大久保浩日本漢字能力検定協会副理事長、金城一守ゼロ・コーポレーション社長、大谷孝彦京町家まちづくりファンド委員長も討論に参加した。

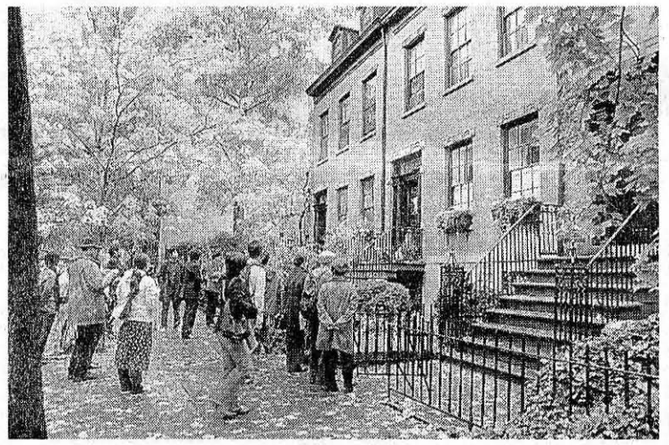
五日夜の公開フォーラムは、現地でまちづくり活動やその支援に携わる人たち約百人を招いて行われた。テーマは「包囲下の街・京町家を破壊から救おう」。町家減少の実態を伝える映像を上映した後、米国への移民が暮らした住居を博物館に再生した「テネメントミュージアム」の創立者ルース・エイブラム氏の司会で、京都の実情が報告された。

京町家再生研究会の小島富佐江事務局長が自身の町家生活を紹介し、建築家の隈研吾氏は「日本の建築の要素は多くの偉大な建築家が参考にしている。町家を守ることは世界的にも意義がある」と保存の必要性を訴えた。

会場からは「日本は国宝の保存に熱心なのに、なぜ町家は適用されないのか」「税制面の優遇の可能性はあるのか」などの質問が出された。京都市景観まちづくりセンターの三村浩史理事長は「日本人は文化や暮らしを誇りとするのを恥ずかしがっていたが、その考え方を変えようというのが今回のプロジェクトにつながっている」などと説明した。

会議のほか、WMFやアメリカン・エクスプレス財団との意見交換も行われた。テネメントミュージアム、ブルックリン地区など古くからの建物が残る現場も巡った。

京町家の構造の特徴や暮らしの魅力に加え、減少の危機を伝えた公開フォーラム（ジャパン・ソサエティー本部）



ニューヨーク市・ブルックリンの歴史的建造物保存地区を見学するプロジェクトの参加者たち

協力の輪 海外に広げて

ニューヨークの会議で重要なテーマとなった資金援助の分野では、日本の制度面での遅れが目立つ。

米国のように寄付控除など税制面の優遇が整っていないため、米国に比べ、市民団体が民間の財団の資金支援を背景に、町並み保存や再生のプロジェクトを進めるような動きが生まれにくくなっている。

京都にも二〇〇五年に設立された「京町家まちづくりファンド」がある。東京の篤志家からの寄付五千万円を元にスタートし、これまで町家の改修に約三十件の実績を上げているが、寄付控除を受けられない仕組みや日本の企業の消極性が壁となり、ファンド本来の姿である運用益による資金援助には至っていない。

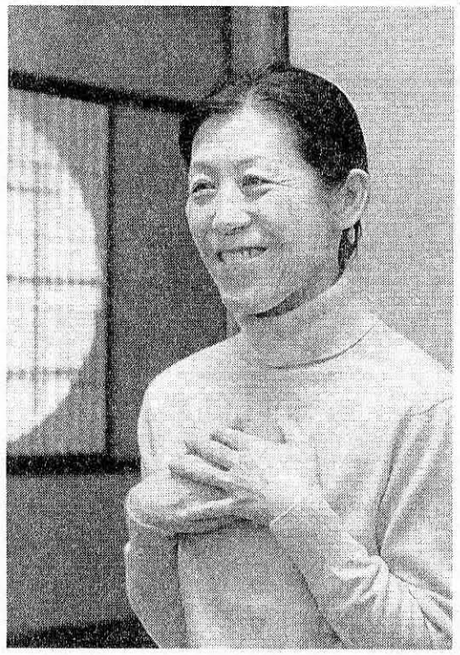
このため、今回のプロジェクトでは、市民レベルでの交流に加え、京町家に関心を寄せる海外からの支援につなげようとの狙いもあった。

企画から携わった立命館大のリムボン教授は今後を見据え、「最大の成果はニューヨークの人たちとの間でネットワークが築けたこと」とみている。

金融危機の対応に追われるはずの米国の財団関係者が、町家の会議に高い関心を示した動きをとらえ、「今後は町家ファンを世界中から発掘するべきだし、それができる。相手は世界。海外に協力の輪が広がり、『外圧』となって日本の国の関心が変われば」と期待を寄せる。

街を守る危機感が必要

会議に参加した京町家再生研究会の小島富佐江事務局長



ニューヨークの会議に参加した京町家再生研究会の小島富佐江事務局長に、感想と今後の展望を聞いた。

◇

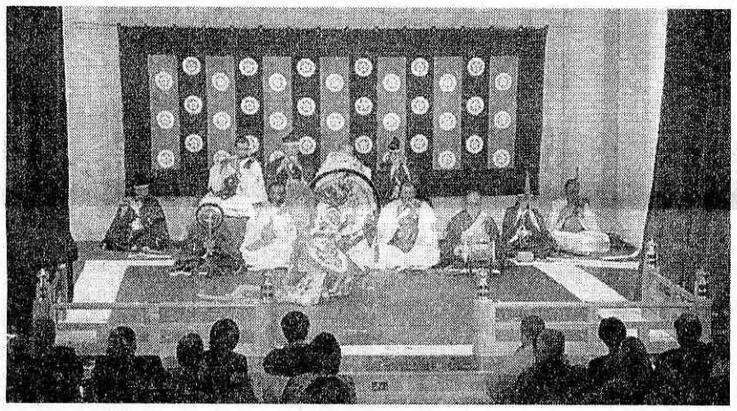
ニューヨークではものすごくNPO（民間非営利団体）の活動が活発で、いろんなところに出向いて資金を調達している。それに引き換えわたしたちは、「何とか自分たちで賄おう」「迷惑かけないでおこう」という発想が強かった。協力してもらうための説得力と行動力を身につけなあかん、と感じた。

五年前に行ったときから、ニューヨークの街の見方が変わった。世界の最先端と言われ、ビルがどんどん建て替わっているのかと思ったら、マンハッタンでも建て替えの頻度は低く、百年ぐらいたっている建物が多かった。それが法的にも税金の減免などで当たり前のように守られている。半面、この意識や制度がなかなか日本に根付かないと実感した。

なぜニューヨークの人たちがそこまで動けるのか。話を聞くと、ハーレム地区などは、かつてとことんまで街が荒れた。それを目の当たりにして頑張っているから、力強さがある。そういう危機感は京都にはないが、本当はなくてはならない。

京都での町家保存の活動は飽和状態のようになっていて、次の突破口が何かなかなか見つからないと感じていた。ちょうどそういうときにニューヨークへ行って、違うアプローチが出てくるかなという期待感を持てるようになった。もうひと頑張りしようかな、と思っている。

昼夜２回公演で人気を集めたボストンでの雅楽公演（昭和女子大ボストン校レインボーホール）



雅楽の調べ 市民ら魅了

ボストン

11月７日にはボストンに移動し、市役所の表敬訪問や昭和女子大キャンパスでの雅楽公演が行われた。

雅楽公演は今年の源氏物語千年紀にちなんで企画され、関西を中心に演奏活動に取り組んでいる「音輪（おとのわ）会」が舞台に立った。当初は夜の１回公演の予定だったが、申し込みが殺到し、急きょ昼夜２回公演に変更。計約320人の観客が舞楽や声明の調べを楽しんだ。

８日には、姉妹都市提携20周年で京都市から贈られた京町家を展示しているボストン子供博物館などを視察した。